

第2回日本CLIL教育学会（於 早稲田大学）

高校・大学英語教育における哲学的（公民科的）CLIL 授業実践 ～高大連携の可能性を考える～

筑波大学大学院人文社会科学研究科博士後期2年
つくば開成国際高校 非常勤講師
帝京科学大学 非常勤講師
y105116y@yahoo.co.jp

松島恒熙

はじめに

本発表の内容

- 高校英語におけるCLIL実践（つくば開成国際高校）
 - 学習指導要領とCLILの関係性
 - 大学受験英語との親和性
 - 他教科との連携可能性
- 大学英語におけるCLIL実践（帝京科学大学）
 - 大学における教養教育の意味
 - 大学で英語を学ぶ意義について

①通信制（単位制）高校について

- ・レポート（自分で選択、期限までに提出）
- ・スクーリング（登校）
（一般コース集団授業、進学コース集団授業、個別指導）
- ・定期試験（レポートから出題）

→3つが満たされて単位が認められる。

①通信制（単位制）高校について

どんな生徒が通っているのか？

- ・全日制高校に行かなかった
- ・全日制高校から転校してきた
- ・芸能活動と高校生活を両立させたい
- ・仕事をしながら高校卒業資格を取りたい
- ・体調面などの理由で毎日通うことはできない

→自分のペースで通うことができる

自己肯定感が低い傾向（「どうせ自分は○○できない」）

学校に登校しても、勉強ではなくゲームをして過ごす

（「遊び場」としての学校）

①通信制（単位制）高校について

スクーリングにおける集団授業

- ・ 受講生は1年生～3年生（学力や年齢は様々、1回完結型授業）
- ・ 学校に来るきっかけ作り
- ・ 友人を作る
- ・ それぞれの教科に興味を持つ→進学コースへ
- ・ 勉強の楽しさに気づく
- ・ 英語で「遊ぶ」→「英語を学ぶ」から「英語で学ぶ」へ(CLIL)
- ・ 「遊び場」としての学校 → 「school」の語源を考える
- ・ 評価（点数）のための学習から「余暇・遊び」としての学習へ
→教室を、生徒の「what」ではなく 「who」を引き出す「公共性」へ

②公民科における「公共性」とCLIL実践

『高等学校学習指導要領「公共」』（pp.92～99）

A 公共の扉

- (1) 公共的な空間を作る私たち
- (2) 公共的な空間における人間としての在り方生き方
- (3) 公共的な空間における基本的原理

B 自立した主体としてよりよい社会の形成に参画する私たち

ア 知識及び技能

イ 思考力、判断力、表現力

C 持続可能な社会づくりの主体となる私たち

ア 論拠を基に自分の考えを説明、論述

②公民科における「公共性」とCLIL実践

A 公共の扉

(1) 公共的な空間を作る私たち

- ・「先人の取組や知恵」
- ・「自分自身が、主体的によりよい公共的な空間を作り出していかうとする自立した主体」
- ・「集団の一員として生き、他者との共働により当事者として国家・社会などの公共的な空間を作る存在」

②公民科における「公共性」とCLIL実践

A 公共の扉

(2) 公共的な空間における人間としての在り方生き方

- ・「幸福、正義、公正」
- ・「人間としての在り方生き方に関わる諸資料」
- ・「行為の結果である個人や社会全体の幸福を重視する考え方」
- ・「行為の動機となる公正などの義務を重視する考え方」

教室・授業における「公共性」とは？

→英語を学びやすい「公共的な空間」とは？

③ハイデガーの世人論における「公共性」

ハイデガーによれば、世人(das Man)の「公共性Öffentlichkeit」は、以下の「懸隔性Abständigkeit」「平均性Durchschnittlichkeit」「均等化Einebung」という3つの契機から構成されている。

「懸隔性」とは、「他者たちとの優劣を気遣うこと」(SZ 126)であり、人間は他者に対して劣っているのを取り戻そうとしたり、他者に対して優位を保ちながら抑圧しようとする。

「平均性」とは、「当然とされているもの、ひとが通用させたりさせなかったりするもの、成果を是認したり否認したりするもの」(SZ 127)のうちにおのれを保持しようとするものである。このような平均性は、「でしゃばってくるあらゆる例外を監視する」(SZ 127)。

「均等化」とは、以上のようなでしゃばってくる「例外」が「音も立てずに押さえつけられる」(SZ 127)ということである。

③ハイデガーの世人論における「公共性」

われわれは、世人の在り方において、他者との優劣を気遣ったり、その平均性を気遣ったりすることで、例外や「親密になれないことをすべて押さえつける」(SZ 192)のである。

世人というかたちをとった相互共同存在 Miteinandersein は、緊張して互いに監視し合っており、内密に相互に盗み聞きし合っている。互いに好意を寄せ合っているという仮面Maskeのもとで演じられているのは、互いの敵意なのである。(SZ 175)

③ハイデガーの世人論における「公共性」

そのような「公共性」に安住し、差しあたりたいてい世人の在り方をする人間は、「世人への傾聴」(SZ 271)によって自身の声を聞き落すことになる。

現存在は世人の公共性や空談のうちへと自己を喪失し、
[中略] おのれ固有の自己を聞き落とすのである。(SZ 271)

→ハイデガーにおいて「公共性」は、自己を喪失するものとして語られている。各人に固有で画期的な発話は生まれない状況。

④アーレントの活動論における「公共性」

ハイデガーの世人における「公共性」に対して、アーレントの目指した「公共性 publicness」とはどのようなものであろうか。

まず第一に、アーレントの「公共性」には、「複数性 pluralityという人間の条件、すなわち、地球上に住むのが一人の人間manではなく、複数の人々menである」(HC 7)ことが求められる。

④アーレントの活動論における「公共性」

アーレントにおける「複数性」とは？

多種多様な人々がいるという人間の複数性は、活動actionと言論speechがともに成り立つ基本的条件であり、等しさequalityと差異distinctionという二重の性格をもっている。もし人間が互いに等しいものでないならば、お互い同士を理解できず、自分たちよりも以前にこの世界に生まれた人々を理解できない。そのうえ未来のために計画したり、自分たちよりも後にやってくるはずの人々の欲求を予見したりすることもできないだろう。しかし他方、もし各人が、現在、過去、未来の人々と互いに異なっていなければ、自分たちを理解させようとして言論を用いたり、活動したりする必要はないだろう。(HC 175-176)

④アーレントの活動論における「公共性」

アーレントにおける「複数性」とは？

人間の「複数性」は、同じ人間である、対等であるという意味において「等しさ」を持ち、しかし互いに異なる意見を持つという意味において「差異」をも持っている。われわれは、この2つを前提としているがゆえに「言論」や「活動」によってお互いを理解し合おうとする。そしてこの「言論」や「活動」こそが、それぞれの人間の「唯一性uniqueness」を現す契機となる。

④アーレントの活動論における「公共性」

アーレントにおける「複数性」とは？

われわれは、「言論」と「活動」を通して、他者との「差異 distinction」を表明し、「人々 men」として相互に現れる。ここでの「差異」とは、世人の「懸隔性」における「優劣」のようなものではない。

アーレントにおける「差異」とは、「活動と言論によって自分が誰 who であるかを示し、その唯一な人格的アイデンティティを明らかにし、人間世界にその姿を現す」(HC 179)ことで生じるものである。

④アーレントの活動論における「公共性」

したがってアーレントの「公共性」とは、人間が複数集まればすぐに成り立つというものではなく、各人の「差異」が表明されて初めて実現されるものであり、それはいわば、ハイデガーの「公共性」とは真逆のものである。

つまり、ハイデガーにおいては、ひとが複数集まって平均的な会話（空談）をしている画一的状況こそが「公共性」であったのに対し、アーレントの「公共性」は、その画一的状況がむしろ各人の「差異」によって決裂することで生じるといえる。

④アーレントの活動論における「公共性」

画一的な「社会」

社会は、それぞれの成員に、行動／振る舞いbehaviorを期待し、無数の規則を押しつける。そしてこれらの規則はすべてその成員を「正常化」し、彼らを行動させbehave、自発的な活動actionや目立った成果を排除する傾向をもつ。(HC 40)

→「学校という社会」に当てはめると。生徒・学生の「行動behavior」における「特質、才能、能力、欠陥」(HC 179)すなわち「何whatであるか」(HC 179)という側面だけが評価される。

④アーレントの活動論における「公共性」

目指される教室空間とは？

「社会」

→ 「行動behavior」、「何Whatであるか」、画一的な「能力」

「公共性」

→ 「活動action」、「誰Whoであるか」、唯一的な「差異」

⑤ 『高等学校学習指導要領 「外国語」 』 (pp.216 ~242)

英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ

→聞くこと、読むこと、話すこと（やり取り）、話すこと（発表）、
書くことの5つの領域

言語の使用場面の例

(ア) 生徒の暮らしに関わる場面

・家庭での生活 ・学校での学習や活動 ・地域での活動 ・職場での活動など

(イ) 多様な手段を通して情報などを得る場面

・本，新聞，雑誌などを読むこと
・テレビや映画，動画，ラジオなどを観たり，聞いたりすること
・情報通信ネットワークを活用することなど

(ウ) 特有の表現がよく使われる場面

・買物・食事・旅行・電話での対応・手紙や電子メールのやり取りなど

⑤『高等学校学習指導要領 「外国語」 』(pp.216～242)

論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

→話すこと（やり取り）、話すこと（発表）、書くことの3つの領域

- ・「日常的な話題や社会的な話題」
- ・「ディベートやディスカッションなどの活動」
- ・「スピーチやプレゼンテーションなどの活動」
- ・「意見や主張などを論理の構成や展開を工夫して話して伝える」
 - 「言論」や「活動」によって「公共性」が求められる

⑤『高等学校学習指導要領 「外国語」 』（pp.216～242）

- ・「主体的・対話的で深い学び」
- ・「言語活動で扱う題材は、生徒の興味・関心に合ったものとし、国語科や地理歴史科，理科など，他の教科等で学習した内容と関連付けるなどして，英語を用いて課題解決を図る力を育成する工夫をすること。」

⑥高校英語におけるCLIL実践

授業実践A：似ている意味の単語の違いについて考察する

- ・ talk, speak, tell, say, state
- ・ practice, exercise, drill, training
- ・ price, cost, charge, expense, fee, fare

→ A 公共の扉(1)

人間は、個人として相互に尊重されるべき存在であるとともに、対話を通して互いの様々な立場を理解し高め合うことのできる社会的な存在である

⑥高校英語におけるCLIL実践

授業実践B：先人の言葉に触れ、文法を習得する（※資料を参照）

- ・受験に必要な文法や構文が用いられた名言などを読みとり、翻訳する

→A 公共の扉(1)

伝統や文化，先人の取組や知恵に触れたりすることなどを通して，自らの価値観を形成するとともに他者の価値観を尊重することができるようになる

→A 公共の扉(2)

人間としての在り方生き方に関わる諸資料から，よりよく生きる行為者として活動するために必要な情報を収集し，読み取る技能を身に付ける

⑥高校英語におけるCLIL実践

課題

- ・ グループワーク、ペアワークにおいて日本語使用が増える。
- ・ 大学受験勉強との親和性に疑問が残る。
- ・ CLILの4Cをどれほど満たすことができるのか。
- ・ そもそも対話型授業が苦手な生徒はどうすればよいか。
- ・ 対話における「差異」の表明と「合意」形成の関係は？
→授業における「正解」とは何か。「合意」とは何か。

⑦大学英語（教養教育）におけるCLIL実践

帝京科学大学 総合教育センター

- ・ 自然系教養科目
- ・ 人文・社会系教養科目
- ・ コミュニケーション科目（語学科目、情報科目） → 基礎英語Ⅰ・Ⅱ
- ・ スポーツ科目
- ・ 教職科目
- ・ 複合系教養科目

⑦大学英語（教養教育）におけるCLIL実践

教養教育における英語

- ・ 受験勉強を終えた大学1年生
- ・ 将来必ずしも専門的に英語を使用するわけではない
- ・ 必修科目である（単位が取れさえすればよいと考える）
- ・ そもそもなぜ英語を勉強するのか？「理由reason」「目的purpose」
- ・ 英語が得意とはどうゆうことか？

⑦大学英語（教養教育）におけるCLIL実践

授業実践C：英語で哲学する（ワークシートから学生の解答を抜粋）

What is “school”？

→勉強するところ、しんどいところ、友達を作るところ

What is “language”？

→コミュニケーションの手段、ジェスチャー、〇〇語、動物にはない

Why do we study English?

→単位が必要だから、海外に行くため、親に怒られるから、洋画を見たい

What does “Be good at English” mean?

→ペラペラに話すこと、テストで高得点、原文が読める、字幕なし

⑦大学英語（教養教育）におけるCLIL実践

授業実践D：哲学書を原文で読み、考える（※配布資料を参照。）

- ・ Labor、Work、Action

- それぞれの概念に、自分の実存における実感を当てはめていく

- 授業の「お客さん」ではなく「当事者」に

- 学生、教員の両者にとって「授業」自体はどれに当てはまるのか？

⑦大学英語（教養教育）におけるCLIL実践

課題

- ・高校と大学において生徒・学生が求められる「英語力」に違いがある。
→受験のための英語か、学問としての英語か
- ・「正解」のない課題に対して、自信を持って発言できない学生もいる。
→高校までずっと「正解」が求められてきた弊害か
- ・難解な哲学書になると、解釈、翻訳するだけで大変な場合がある。
→翻訳した内容について、自己の実存を関連させた対話が必要

おわりに

われわれ（学習者と教員の両方）は
「学校」において、「遊び場」（活動）としての
「School」を取り戻すことができるだろうか？

参考文献(外国語文献)

SZ= Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 18. Aufl., Max. Niemeyer, 2001

(『存在と時間』からの引用は SZ と略記した後にページ数を示す。)

GA=Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Frankfurt an Main:Klostermann

(ハイデガー全集からの引用はGAと略記し、巻数とページ数を示す。)

HC=Hannah Arendt, *The Human Condition*, The University of Chicago Press, 1958

(『人間の条件』からの引用は HC と略記した後にページ数を示す。)

- SZ: Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 19 Aufl., Max Niemeyer Verlag, Tübingen 2006.

マルティン・ハイデガー著(2003), 渡辺二郎・原佑訳、
『存在と時間Ⅰ』(中公クラシックスW28) 中央公論新社
『存在と時間Ⅱ』(中公クラシックスW29) 中央公論新社
『存在と時間Ⅲ』(中公クラシックスW30) 中央公論新社

- GA27:*Einleitung in die Philosophie* (Wintersemester 1928 /29). Otto Saame und InaSaame-Speidel (hrsg.). Vittorio Klostermann. Frankfurt a. M 1996 [2001]. (茅野良男／ヘルムート・グロス訳(2002)『哲学入門』創文社)
- GA29 / 30: *Die Grundbegriffe der Metaphysik. Welt-Endlichkeit-Einsamkeit* (Wintersemester1929/30). Friedrich-Wilhelm von Herrmann (hrsg.). Vittorio Klostermann. Frankfurt a. M 1983[1992 / 2004]. (川原栄 峰／セヴェリン・ミュラー訳(1998)『形而上学の根本諸概念 世界—有限性—孤独』創文社)
- GA63:*Ontologie(Hermeneutik der Faktizität)* (SS 1923), 1988
(篠憲二ほか訳(1992)『オントロジー (事実性の解釈学) 』創文社)
- HC : Hannah Arendt, *The Human Condition*, The University of Chicago Press, 1958
(志水速雄訳(1994)『人間の条件』筑摩書房)

参考文献(日本語文献)

- ・池田真／和泉伸一／渡部良典(2012):『CLIL (内容言語統合型学習) : 上智大学外国語教育の新たな挑戦—第2巻 実践と応用』, 上智大学出版
- ・池田真／和泉伸一／渡部良典(2012):『CLIL (内容言語統合型学習) : 上智大学外国語教育の新たな挑戦—第3巻 授業と教材』, 上智大学出版
- ・川崎修(2005):『アーレント 公共性の復権』, 講談社
- ・川原栄峰(1981):『ハイデガーの思惟』, 理想社
- ・菊間ひろみ(2016):『名言だけで英語は話せる!』, 幻冬舎
- ・久保紀生(2007):『ハンナ・アーレント 公共性と共通感覚』, 北樹出版
- ・斎藤純一(2000):『思考のフロンティア 公共性』, 岩波書店
- ・志水健二／すじきひろし(2016):『似ている英単語 使い分けBOOK』, ベレ出版
- ・清水亮／橋本勝／松本美奈(2009):『学生と変える大学教育 FDを楽しむという発想』, ナカニシヤ出版
- ・新村洋史(2013):『人間力を育む教養教育—危機の時代を生き抜く』, 新日本出版社
- ・轟孝夫(2007):『存在と共同 ハイデガー哲学の構造と展開』, 法政大学出版局
- ・東北大学高度教養教育・学生支援機構(2016):『高大接続改革にどう向き合うか』, 東北大学出版
- ・東谷護(2019):『教養教育再考 これからの教養について語る五つの講義』, ナカニシヤ出版
- ・中島道男(2015):『ハンナ・アレント 共通世界と他者』, 東信堂
- ・松島恒熙(2018a):「郷愁としての哲学 - ハイデガーの気分論をもとに - 」, 筑波大学倫理学会編, 『倫理学』 第34号, pp.93-112
- (2018b):「ハイデガーにおける『日常性Alltäglichkeit』概念の再考」, 求真会編, 『求真』 第23号, pp23-39
- (2019a):「人間の「自由」と「世界」との関わりについて—ハイデガーとアーレントの思想をもとに—」, 『倫理学』, 筑波大学倫理学会編、第35号、pp.109-124
- (2019b):「対話と「公共性」の関連をめぐって」, 『思考と対話』, 日本哲学プラクティス学会編, 第1号, pp.12-22
- ・吉田文(2013):『大学と教養教育 戦後日本における模索』, 岩波書店
- ・『高等学校学習指導要領』 (平成30年告示)
- ・『高等学校学習指導要領解説 公民編』 (平成30年告示)
- ・『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』 (平成30年告示)